

これは、ひとりの個人の年1200万円10年間の寄附を原資とし、
その他多くの方々の寄附をいただいて活動しています。



このパンフレットは環境に配慮した
「水なし印刷」により印刷しております。



環境にやさしい植物油インキ
「VEGETABLE OIL INK」で印刷しております。

この子を育てる

～東日本大震災後の親族里親の声から～



東北大学大学院教育学研究科
震災子ども支援室
“S-チル”

はじめに

平成23年3月11日の東日本大震災により両親を亡くした子どもたち(いわゆる震災孤児)は被災3県で253人にのぼります(2014年9月:自治体調べより)。そうした子どもたちのほとんどは、親族である祖父母やおじ、おばに引き取られました。突然に保護者になられた親族里親の方々は、ご自身の悲しみに向き合いながら、日々成長していく子どもたちと接していらっしゃいます。

東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室(S-チル)は、震災後、宮城県なごみの会(旧里親連合会)、宮城県内各児童相談所とともに、県内各地で定期的に親族里親サロンを開催し、親族里親さん同士の語らいの場として使って頂いています。私たちは、そのお話をうかがいながら、可能であれば、親族里親の方々がどのような気持ちで子育てをおこなっているのかについて、いつか皆様にもお伝えできないものかと思っていました。

この思いに、親族里親14家族が応えてくださいました。2013年10月から11月にかけて、震災子ども支援室の相談員と筆者らがお宅に訪問してお話をうかがいました。そして、得られた語りを文字に起こした後、内容によって分類整理を行いました。その際、東北沿岸部の生き生きした言葉をそのままお伝えしたかったのですが、多くの方々にお読みいただくために、内容が変わらない範囲で一部表現を修正させていただきました。この点について、どうかお許し下さい。

本冊子は、その結果をまとめたものです。ご協力下さった親族里親の方々だけでなく、その周囲の方々、親族里親制度を利用されていない親族の方々、あるいは震災遺児・孤児支援を行っているの方々、遠く離れた地で震災後の東北に気持ちを寄せて下さる方々にも、本冊子をお読みいただければ幸いです。そしていつの日か、里子にあたるお子さんご自身がこの冊子を手に取り、「この子を育てる」と心に決めた保護者の方々の思いを知ることがあれば、震災子ども支援室にとってこれ以上の喜びはありません。

最後になりましたが、東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福を心からお祈り申し上げますとともに、親族里親さんのご健康とお子さんの健やかな成長をお祈りいたします。

東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室
室長 加藤 道代

*この調査は、東北大学大学院教育学研究科研究倫理委員会より承認を得て実施されました。



目次

1. 親族里親制度について(里親制度の認知) p.3

2. 親族里親になった時の気持ち p.4

- 使命感
- 親族里親制度
- 当然
- 不安・心配
- 励み

3. 子どもの生活への配慮や工夫・困っていること p.7

- 配慮・工夫
- 困りごと

4. 役に立った支援、使いにくかった支援 p.10

- フォーマルな支援
- 身近な支援
- 支援への抵抗感
- 支援に関する願い

5. 現在の気持ち p.14

- 亡くなった人への思慕
- 子どもの気持ち
- 不安・心配
- 精一杯
- 覚悟
- 喜び
- 願い
- 気づき



1

親族里親制度について (里親制度の認知)



今回の調査は、親族里親サロンに参加されていらっしゃる方の中から、協力を頂けた親族里親14家族（宮城県内親族里親全体の35%）の結果である。震災当時、これらの里親さんは50代～70代、一方、お子さんは幼児から高校生であった。

震災前からの同居は4名、非同居は10名。震災前の接触頻度は週2、3回～年2、3回と、その頻度は様々であった。

親族里親制度について、知っていた方は2名、知らなかった方は9名、名前だけ聞いたことがあった方は3名であり、ほとんどが里親制度について詳しく知らない状況であった。

親族里親制度について、震災後に市町村の担当者、児童相談所、学校などを通じて制度を知った。

2

親族里親になった時の 気持ち



親族里親には里子の将来や血のつながらない配偶者への心配がありつつも、子どもを引き取るのは当然であり、「育てるのは自分しかいない」という覚悟があった。「この子がいるから生きていれる」と、子どもの存在は励みになった。

使命感

1人残された自分の身内なので、育てるのは自分しかいないと思いました。

私はねえ、娘を失くしたから、娘の生まれ変わりだと思って自分の子どものように育てていこうと思いました。

私がしっかりしなくてはならない。私の場合はしつけだね。最初から(孫に)、「籍の上ではあんたのおばあさんだけど。あんたと一緒に暮らすにあたって、私はママの代わりだ」って言ったんだ。

亡くなった娘のことで頭がいっぱいでしたが、孫には私しかない、孫と一緒に生きて行こうと決心した。

親族里親制度

嬉しかったね、そういう制度があって。

こういう制度があって、すごく良かったなっていう風に思ってます。

何かあったときは、フォローしてもらえる安心感がある。

「親族里親」っていうのがまず分からなかった。何で「里親」なの?って。血がつながってるし身内じゃない、っていう思いは今でもあります。

家庭訪問してくれてね、いろいろ聞いて相談にものってくださいるので助かります。



当然

(母親が亡くなったのを知って)孫が泣いたとき、頭なでて「おめえ一人じゃないから。ここは、あんたが産まれたところだから、来ていいんだ」って言った。

小さい頃から、私が抱っこして寝せたりして育ててたから、特別はねー、考えないですね。

知らないところで一人にするより、うちに置いた方がいいと思った。

不安・心配

里親と里子っていうと、孫が大きくなってきたり、就職の時など、何か差し支えることがあるんじゃないかなー、どうかなーと考えて、1回はお断りしたんです。だけど、「全然心配ないですよ」って言われて、安心しました。

自分にとっては妹の子だから預かることに抵抗はなかったですが、(血のつながっていない)夫にとってはどうだったろうかと心配しました。

一生懸命頑張って育てなくちゃならないなって、少し重荷なところもありますよね。全然ないって言ったら嘘になります。

励み

孫がいなかったら私は生きていない。孫がいるから私は生きていられる。

(娘は失ったけれど、生き残った孫を育てられるという)この嬉しさ。あくまでおばあちゃんなんだけど。うん、この子を育てるっていうやっぱり意気込みだね。しっかりしなきゃいけない、自分がね。

3

子どもの生活への配慮や工夫・困っていること



「(子どもは)すごく傷ついていると思うが、真綿でくるんだようでも駄目」
「子どもを1人にはしない」
「部活や学校行事は見に行く」
「可愛いがられて育ったと思えるようにしたい」等、
自分なりの配慮と工夫が見られたが、自分の子どもではないので
思ったように叱れないという困りごとが多かった。

配慮・工夫

何するときにも必ず声をかけて、
子どもを一人にはしない。

子どもが年齢的に抵抗、反抗する時あるからね。そういう時はこちらが一步ひいて、俺たちが折れるほうがいいなって思うのね。

しつてもやろうと思うんですけども、かわいそうだなって思うのが先立って、なかなか出来ない。ただ食べるものは、野菜でも何でもいろんなものを口にさせたいと思って。朝はご飯とみそ汁は必ず食べさせるようにしています。それぐらいしか私はできない。

お母さんがいなくなったっていうのは、すごく傷ついていると思うんですね。だからと言って真綿でくるんだような言い方すれば、子どもたちは私たちと一緒に暮らすのにかえって気遣うことになる。

一緒にいる時間を多くとるようにしています。基本的に実子と里子を同じように手をかけるようにしていますね。でも、子どもからしてみたら、「誰々ばかり」みたいに思われていないかなっていう心配もあります。

部活の練習試合でも学校行事の授業参観でも、見に行くようにしてますね。子どものお母さんたちとも話す機会が増えた。今は、携帯電話のラインで、学校からのお知らせを確認するっていう作業をしている。

どこに出かけるにも、「気をつけなきゃダメだよ」って、必ず一言言っている。

私の妹の子だし、旦那からすれば他人だもなって。だから子どもの練習試合があるときは旦那と一緒にってもらってる。旦那は野球を指導した時期があるので、私が見るより旦那に見てもらったほうがいいっちゃって言って。

困りごと

子どもが、宿題をする習慣がなくて困っている。

パソコンだ、インターネットだって、俺たち全然わかんないから、それがこれから一番心配なの。

(自分の)子どもであれば怒るんだけど、孫となるとやっぱり怒れないのよ。

私は、学校の保護者会とか、甥っ子の学校生活に途中から入っていくことが不安でした。

子育てって難しいですよー。自分が産んで、小さいときから育てて、こういう子だってわかってるんだったら、もっとやりやすいのかな。わたしはこの子がある程度分かってはいたつもりだけど、やっぱり外側から見てると、四六時中一緒にいるとまた違いますよね。だからそういった面でのギャップが埋まらなくて、埋めようとするから悩んだ。

自分の子ならね、そこで大きな声出して叱ることもできるけれども、それはできないし。こっちの方が抑える方が多くなって、そのへんの苛々はありますよね。



4

役に立った支援、 使いにくかった支援



経済的支援、児童相談所による家庭訪問等のフォーマルな支援の他、学校を通じた周囲の父兄たちや実子にあたる家族等の身近な支援に対する感謝が述べられた。反面、混乱状態の中での支援勧奨や、そっとしておいてほしい部分に踏み込まれるような支援への抵抗感もあった。子どもにとって、単に支援を受けることによって「やってもらうことが当たり前」になることを危惧し、「子どもの方から何かしてあげよう」という気持ちが芽生えるのを期待する支援に関する願いも見られた。



フォーマルな支援

子どもへの学習支援があって助かった。

自分たちに子供がいなかったの
で、サロンであったり、お金の支
援だったりっていうのは、ほんと
に助かりましたね。

児童相談所の毎月の生活支援。
子どもたちのためにしていただ
いたっていうのは本当に助かり
ました。どんな綺麗ごとと言った
って、先立つものはお金だと思う
んです。

(手当があって)助かったね。最
初は孫が心配して、「ばあちゃん、
お金あるのか、お金あるのか」
って、いちいち聞いたんだ。「大
丈夫だ、高校に行くくらいある
から」って言ったら、「安心した。
俺、一時、どうなるかと思った。
」って。

やっぱり児童相談所から家庭訪
問に来ていただけるってことが
一番おっきいですね。月一回って
いうペースもすごく助かります。
問題があればそのことに対して
も対応してくれるので、私自身の
気持ちもすごく楽で、子どもと安
心して接することができる。

自分には子どもがいなくて子育
ての経験がない。児童相談所の
相談員さんが、いろいろ相談に
のってくれるので助かっている。

児童相談所からの家庭訪問ある
いは里親会の場で、里親として
の苦労話、子どもの日々の様子
を聴いていただく中で、里親と
しての自覚が養われ、子どもの成
長の姿を改めて振り返ったり、ま
た、これからの子どもの行く道
を考えることができるようになった
と思います。



身近な支援

娘しかいなくて男の子は育てた
ことがないので、育児の部分で
は、友達のお母さんに相談した
りしています。

(実の)娘たちに、「お母さん、今
の子育てはこうなんだよ」ってア
ドバイスうけるんですよ。

私は「かわいい、かわいい」でし
つけも何もできないから、みん
なに教えてもらっている。

(実の)娘たちが、日曜日ってい
うと子どもと一緒に連れて出か
けてくれる。本当は私たちがす
ればいいのかもしれませんが、年
寄りだから運転危なっかしいから。
遠くに行くことはできない。娘た
ちには感謝してんのね。

相談する場合は息子(実子)たち
と相談する。

運動会には私の実家の姪や(実
の)息子どっちかが出て、孫と一
緒に手つないだりおんぶしたり
して走ってくれる。

教頭先生とか先生たちから、
「大丈夫ですよ、おばあさん、み
んな一緒に学校も協力しますか
ら」って言われたので心強かつ
たですね。

部活等の行事への送り迎えで、
道がわからない時などは「お願
いしますねー」って頼んでいま
す。周りのお母さんたちもお父
さんたちも、嫌な顔もしないで
面倒見てくれる。お茶当番とか
おにぎり当番とかってあるので、
そういうことは「私もやります
よ」って、積極的に参加するよう
にしています。





支援への抵抗感

使いにくいっていうか、年度替わりには必ず必要になってくる申請関係。小学校卒業して中学校に進学ってなった時に在学証明とか、また一から取り直さなきゃいけなかったんで、それがちょっと手間だった。

いっぱいいろいろ声掛けてもらおうと、なんとなく踏み込まれてるかな、っていうのも思うんですね。そこはいいからそっとしておいて、みたいなところもやっぱりあるので。

ごちゃごちゃの中で何もかにも収まってないときに「あれしますか？これしますか？」っていうのは多分、ちょっとキツイかったなって思うんですね。



支援に関する願い

この子が学習面でわからないとき、気軽に出入りできるような、いつ行っても聞けるようなそういうところがあればいいのになって思う。中学生になると、部活とか忙しくなってくるので、子どもも助かるのかなって。

こういう子って、みんなが可哀想、可哀想って、声かけてくれたりいろんなところに連れてってくれたり買って与えたりするので、逆に、ただやってもらうのが当たり前、自分から誰かを思ったりすることがちょっと不足してるのかなって感じます。

やってもらうだけでは、やってもらうことがこの子にとって当たり前になってしまう。この子から率先してなんかやってやろう、みたいなことも大事だと思う。周囲には自分より小さい子もいるんだから、なんかしてあげようとか、そういうのも子どもに芽生えないかなって思います。

「～したらいい」という、具体的な助言があったらもっと助かる。

子どもにとっては、ただやってもらうじゃなくて、自分がやってあげられるようなそういった活動もあっていいのかな。

5

現在の気持ち



「娘がいれば」「ママに見せたい」等の亡くなった人への思慕、震災で親を失った子どもの気持ちへの思い、「どういう風に育つのか」「自分たちにもしものことがあったら」という不安・心配もある。しかし、日常は精一杯ながらも「楽しい」「可愛い」「成長を見るのが嬉しい」という喜びは大きい。実子や配偶者と里子の関係への心配があったせいか、家族が仲良くやれている姿を見ることが、家族からの助けも嬉しい。「人並みの社会人になって欲しい」という願いと「自立できるまで頑張る」という覚悟をもって、子育てに向き合っている。「自分の子と同じように可愛い」が、「いくら頑張っても母親にはなれない」という思いもあり、「親にならなきゃ」という思いがストレスだったが、次第に「私は私でいいんだ、お母さんになる必要は無い」との気づきも得られた。



亡くなった人への思慕

喜びはない。(亡くなった)娘がいればと思う、やっぱりここに…。でも、孫がおいしいの食べている時の、顔っちはいいね。可愛いね。うん、ほっとする。

「食べたものは下げるように」って(亡くなった)ママは、この子たちがちっちゃい時から言っていたのに、ここに来て、私が甘やかしてたらしくなくなったの。でも、ママのしつけというのは、身体に染みついているみたい。歯磨きだってちっちゃい頃からやってたから、今もやれてる。

運動会で、鼓笛隊の指揮者になって挨拶したのね。やっぱり(亡くなった)ママに見せたいなあと思った。教頭先生もほめてくれた。書面見ないで、全部自分で暗記して言った、頑張ったって。それが一番感動したね。何あっても全部私に報告してくれる。「今日は運動会だったよ」、「学芸会だったよ」って。「立派だったねえ」なんて言うの、「ううん、たいしたことない」なんて言うんです。

(引き取った)子どもたちがもっと小さかったらどうだったかなというのは考えます。亡くなったお母さんに感謝してるんです。この子たちをこのくらいまで大きくしてバトンタッチさせてもらったので、私たちは楽でした。



子どもの気持ち

「お母さんに会いたい」って言われたの。でもあの写真がお母さんだってわかったみたいなんです。わかってる。

「俺、お母さんじゃなくて、おばちゃんたちと暮らしてるっていうの、おばちゃん、誰かに言った?」って聞かれた。「保護者の人達には『こういう訳で苗字が違うからよろしくお願いします』って挨拶はしたけど」って伝えた。本人は「俺、隠すつもりはないんだけど」って言うけど、そういう風に特別に見られるのが嫌みたい。だから、「何も、全部しゃべらなくてもいいんでないの?」って言ったら、「うん、わかった。」って言っていました。

孫は、あまり口では語らない。でも、母親が死んだ時、孫は「親孝行すると思ったら、しないうちに死んでしまった」っていっぱい泣いたのさ。二晩。

私らは年とってるから、最初から孫は「俺、一人なんだな」って言ってる。自分はひとり立ちするんだって思ってる。私たちには、どうすることも、命令することもできねんだ。

(津波で全てを失くしたが、亡くなった母親と子どもが使っていた布団は祖父母宅に残っていた)いくら新しいのに取り替えても、その布団でなければ駄目だってね。「どこにやった、あれ、気に入ってるんだから」って。そしてずっと使ってるの。温もりっていうかね。だから、そのままにしてるんだ。





不安・心配

将来、自分たちにもしものことあったらと考えてしまうんですね。

孫が精神的な面でこれからどうなるのかなっていうのが不安。

自分の子のようにはいかないので、正直、嬉しいよりも、将来どうなるのか?とか、精神的にも大変な方が多いですね。

どういう風に育ってくれるのかな、育つんだろうかっていう不安です。



精一杯

毎日精一杯。あー今日も終わったなあって。とにかく、夜、布団に眠らせるまでの体力配分が必要。これがいつまで続くことやら。



覚悟

お母さんが死んだ、って聞いても涙一つ流さなかった子なの。私の中ですら(娘が亡くなったことは)処理されてないんだから。あの子の中でも処理されてない。それが反抗期か何かで、外に向けられなかったら、多分私にむかってくると思うんですよ。どっかである程度覚悟もしてる。

20歳くらいまではね、一生懸命育てて面倒みなくちゃなんないなって。この子が大人になるまでは、うちも元気で頑張らなくちゃね。

自分の方が先に年取って亡くなっちゃうので、とにかく、孫を生かす方向を考えなきゃ。孫が自分で自立できるまで。



喜び

孫たちがワイワイで飯食べている姿をみるとき。

弁当は、余りもので同じようなものなんだけどね。でも、喜んで持っていって、みんな食べてくる。

孫は野球をやっていて、ホームラン打った時とか、ファインプレーしたときはやっぱりな。最初は孫が守ったり打つときはね、ドキドキしてね。最近はもう堂々としてるから、安心して見ていられますよ。

やっぱりねえ、可愛くなってくるからね。だんだんねえ、自分の子と同じように。

今まで夫婦2人だけの生活でしたよね。それが子どもが入ってきたことで、夫婦の会話がね、子どもに関してのやり取りになっている。

あんた働くようになったら、一回くらいはさ、おんちゃんとおばちゃんをさ、旅行に連れて行ってねっていったら、「うん、連れていくよ」って、その一言がね。行かないんだけど、やっぱりそう言ってくれるっていうのは嬉しいものだよね。

(出かける時に)孫が、「『行きますっ』て、おじいさんに絶対言っというてね。」って、(その場にはいない祖父にも伝えて欲しいと)私に言うの。それがなんか嬉しいね。玄関あけるとね、「ただいまー」って来るし。「今日のおかずは何ー?」とか。食欲はすごくいいから。元気が取り柄です。

やっぱり寝顔見てるのが1番。子どもが起きてると憎たらしく思うこともある。でも、寝てる姿見るとね、可愛いよね、本当に。だからやっぱり1人前っていうか、ちゃんと大人になるまで。あたしも頑張らなきゃいけないなあなんて思いますね。



喜び

私が「腰痛い」「足痛い」とか言う
とさ、うちの(実の)息子たちと、
みんなでちゃんと茶碗洗ってく
れたりとかさ、嬉しいね。

私とじいちゃん、2人っきりに
なったらやっぱり寂しいよねって
言ってんのね。なんだかんだ忙
しいながらも、やっぱり孫が「た
だいま」って帰ってくるの、やっ
ぱり楽しみだよえって。居てくれ
るだけで。やっぱり楽しいです。

(実子とともに)子どもたち同士
で仲良くいろいろ遊んだり行動
とってるっていうのが一番嬉し
いですね。あとは自分の旦那と
も接してるのを見ると、「あー、な
んかよかったのかな」という風
に思ったりします。

ご飯を作ってくれて、「おばあ
ちゃんのご飯おいしいね」と言
われる時があるのね。「ああ、ま
た頑張んなきゃいけないな」な
んて思います。

(実子とともに)子どもたち同士
がうまくいってればあたしはい
いんです。なんでもみんなで分
かち合ってるっていうか。一人が
怒られてても、ほかの子は知ら
んぷりするわけではなくて、自分
たちも一緒になって座って話聞
いてたりする。誰がどうのではな
く一つのチームみたいな感じが
出来上がってるかなっていう
風に思ってますね。

卒業式の時にもらったお手紙で
ね。私が書いたのに対する返事
だったんですけど、「八つ当た
りしてごめんなさい」とか書いて
あったので、「わかってたんだ」と
思って嬉しかった。

成長したのが見えたときです
ね。私から注意されていたこと
を、そのまんま、低学年の子に
言ってたんですよ。ああ、聞いて
ないようにして、ちゃんと聞いて
たんだあって。「だったら、あんた
もやれ」ってことだけど。



願い

受かる高校に向かって、もう少し
勉強のほう頑張ってもらいたいなと。

中学生なんだからきちっとして
もらわないと。社会に出るとひとり
立ちしなきゃいけないのだから。

私がソファ座ってたら、ひざ掛け
を私に掛けてね、「おばあさん、
子守唄歌ってあげるからねー」
なんて。ずっと優しい子のまんま
でいて欲しいなあって思う。

(孫が大きくなった時に)「俺は
かわいいかわいいで育てられ
たんだ。」「俺はババにはかわい
がられて育った」って思えるよう
にしたい。

将来のこと。当たり前、普通に
いから社会に出て、人並みに。そ
れなりに自分の好きな仕事につ
いてほしい。

できるだけ子どもに、季節のい
ろんな行事をさせてあげたい
なあって思って。いくら頑張っ
ても母親にはなれないからねえ。



気づき

最初は無我夢中でした。私は、
(途中からの子育てだから)親同
士の繋がりがってわかんないじゃ
ないですか。なるべく友達のお
母さんたちともね、交流するとい
うのもね、大切なことなので。

突然に子どもと一緒に暮らすこ
とになり、里親になりましたが、
その時は何もかも無我夢中でや
り遂げなければという思いだけ
が先立ちました。今振り返ります
と、いつのまにか子どもが毎日
家にいることがあたりまえのよ
うな気持ちになっています。

5. 現在の気持ち



気づき

自分が子育てをしていた時と違う子育てなんだと思う。自分の子どものときは、知らないうちにおむつがとれてたけれど、孫になったら、もうそろそろ取ってあげないと。

子育てってこんな感じなのかな。ある程度、こっちの言うことは（子どもに）伝わっているとは思う。向こうも、お弁当のときはお弁当がいいとか、部活のときはコンビニのお弁当でいいとか、言いたいことを言うてくる。

子どもを育てるっていうのは本当に大変なことなんだっていうのが第一で、でもその成長も楽しみでもあり、親としての責任も感じます。血のつながりがあるという部分では、すごくかわいいていう気持ちもあるので、忙しくて大変なんだけれどもそんなに苦痛ではない。ほんとに自分の子どもであればよかったのになっていう風に思う時もあります。それがもう今の生活の基盤になっている。

自分の子を育てるよりは、のびのびと育てている。

自分の子育てより今の方が楽ですね。失敗も楽しいかな、みたいな。自分の子どものときはこんなことなかったような気がしますね。

一緒に住んでるけど本当の親じゃないでしょ。でも、慣れていくうちに、錯覚してしまつて。よくよく考えると「あ、違うんだ」って気づく。だから、あたしはおばちゃんでもいいからと思ってる。

初めは（亡くなった）妹の代わりをしないといけない、お母さんにならなきゃって思ったんですよ。でも、だんだんストレスになってきて。だんだん、私は私でいいんだ、お母さんになる必要は無いんだと思って、そこから気持ちがだいいづ楽になった。預かって3ヶ月かそれくらいでそう思いました。

調査に御協力下さいました皆様に心より感謝申し上げます。



「この子を育てる」

〔編集者〕 加藤 道代 東北大学大学院教育学研究科 教授
震災子ども支援室 室長

平井 美弥 震災子ども支援室 主任相談員

押野 晶子 震災子ども支援室 相談員

大堀 和子 震災子ども支援室 相談員

〔発行日〕 2014年9月1日

〔発行者〕 東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室

〔代表者〕 加藤 道代

住所 仙台市青葉区川内27-1

Tel/Fax 022-795-3263

E-mail s.children@sed.tohoku.ac.jp